

映画「飯舘村の母ちゃんたち」の完成と上映にご協力ください！



飯舘村の佐須地区出身の母ちゃんたちを中心に、伝統の佐須味噌の作り方を全国各地に広めている

人間力を賛歌する映画、それが「飯舘村の母ちゃんたち」です

映画監督・ジャーナリスト古居みずえ氏は、長年パレスチナの人々に焦点をあて取材活動を続け、数多くのドキュメンタリー制作、書籍の出版等で活躍されていますが、国内では初のドキュメンタリー映画となる「飯舘村の母ちゃんたち」を現在制作中です。長年にわたって土地を追われたパレスチナの人々の苦悩と飯舘村の人々の帰村できないという苦悩は、全く同じ一線上に繋がると監督は語ります。

震災後福島県飯舘村に取材に入り、原発事故による放射能汚染ですべて奪われた自然の大地の恵み、そして、そこに生きる人々の生活の営みが完全に崩壊されてしまった悲しみと絶望感を、監督はカメラを通して私たちに語りかけます。その様な先が見えない不安の中にあっても逞しく生き抜こうとする力、明るくユーモアを持って前に進もうとするお母ちゃんたちのエネルギーと笑顔は、パレスチナと飯舘村と国は異なっても、不思議と共通根があります。それは、監督流の人間力の賛歌として表現されているからではないでしょうか。

東日本大震災から5年近くが経とうとしています。決して「フクシマ」を風化させないために、私たちがこの素晴らしい人間力を信じて生きるために、また次世代に正しい記録とメッセージを残すためにも、今を生きる私たちが出来ることはこの映画の完成を実現することと信じます。

撮影をほぼ終え、これからは編集、配給会社探し、広報などの段階に入りますが、それにはまとまった資金が必要です。このままでは、せっかく作品が完成しても世に出すことができません。是非皆さまのご支援で劇場での公開を実現させてください！！

(映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会代表・岡戸良子)

★支援のお願い★

支援金 1口 3000円(個人) 10,000円(団体)
多数口大歓迎！！
ご送金先 郵便振替口座 00160-0-664342
口座名 「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会

4年かけて追いつけた「飯舘村の母ちゃんたち」にご支援を！

古居みずえ監督

2011年3月11日の東日本大震災が起こるまで、私は海外での取材が主で、日本での仕事をしたことがありませんでした。震災、原発事故が起こり、私はあまりの大きな出来事になすすべもなく、自分にできることは何かを探すために、3、4月は被災地を回りました。4月の終わり、ニュースで、それまで名前も知らなかった福島県飯舘村という村が全村避難になることを知りました。

そのニュースは私が長年かかわってきたパレスチナの人々が故郷を追われていく姿と重なりました。自分たちの生活を、農地を、故郷を、すべてを奪われること。そういう意味で、この飯舘村の出来事は他人ごとではないと感じました。

飯舘村を訪ね、最初にそこで見たものは、牛を飼っていた母ちゃんたちが、自分の子どものように育ててきた牛を放射能のために殺処分しなければならず、手放す日でした。「誰のせいなのよ?」「なんでこうなるの?」と顔見知りでもない私に向かって、必死に訴えかけた姿は今も心に焼き付いて離れません。その日に立ちあったことで、それを見たことで、私は飯舘村のことを撮り続けなければならないと思いました。

飯舘村は自然が豊かで、野菜や果物、きのこやわらびなどの山の幸、何でも取れるところです。酪農や畜産も盛んでした。

映画の登場人物の一人で、飯舘村出身の菅野榮子さんは46年間酪農をする傍ら、農業に従事してきました。



わが子のように育てた牛たちを手放す日、思わず涙を流す母ちゃん

榮子さんはたとえ村がなくなろうとも、100年、200年後には誰かが村に住んでくれるだろう、と言います。その時のために村の伝統的な食文化「佐須の味噌」「凍み餅」を後世に残そうとしています。その様子は映画「ガーダ パレスチナの詩」でガーダの祖母が故郷の歌を歌い、村の以前の生活を話すことで、次世代にパレスチナの原点を伝えていこうとする思いに繋がっていると思います。

村の除染が終わった今も、飯舘村の村民の心は、帰るか帰らないか、帰りたくても帰れない、と揺れ動いています。予想通りには放射線量も下がらず、帰村を進めるために基準の年間被ばく線量を上げようとする動きもあり、若い人たち、特に子どもたちは帰りがりません。この先、農業や酪農はできるのかという不安、帰村しても家族がバラバラになってしまう不安、そんな中で、飯舘村の母ちゃんたちは何を思い、どう生きていくのか。彼女たちの生きざまを4年間かけて追いつけた「飯舘村の母ちゃんたち」を一人でも多くの方に劇場でご覧いただきたいと思います。しかしながら劇場での上映を実現させるためには、まだまだ資金が足りません。是非ご協力とご支援をよろしくお願いいたします。



〈古居みずえプロフィール〉

1948年島根県生まれ。アジアプレス所属。1988年からイスラエル占領地・パレスチナの、特に女性や子どもに焦点を当て取材を開始。以降、ウガンダ、インドネシア、アフガニスタンなどでも取材。主な著書に『インティファダの女たち』（彩流社）、写真集『瓦礫の中の女たち』（岩波書店）、『パレスチナ 戦火の中の子どもたち』（岩波ブックレット）、映画監督作品に『ガーダ パレスチナの詩』、『ぼくたちは見た ガザ・サム二家の子どもたち』がある。『ガーダ』は石橋湛山記念ジャーナリズム大賞を受賞している。